

「所蔵作品展 こどもとおとなのアツアツこうげいかん」

会期：二〇一八年六月十九日―八月二十六日 会場：工芸館

私の熔接観

留守 玲^{あき}

習い事の延長で美術予備校に入ってデッサンを知り、それが魅力的だった。概念で曲げずにもものを見る。見ていることを思考する。自分の目に何が見えているのか、その時々の実感を分析することは、ひいては自分を見ることに関わるのではないか。素描の経験を通して得た、そういう思考の時間自体が魅力的で、そういうことをずっと続けていける現場にいたくて美大を受験しました。

多摩美術大学立体デザイン科の金属コースに入学しましたが、実は金属に対して特にイメージがなかった。鍛金^{たんきん}「註1」中心のカリキュラムでした。当初は金属板を見せられても、その板で作りたいものが想像できなかったのですが、三年で鍛金の絞りの授業が始まり、金属の「肉」を動かしながら立体を作ることと学び、こんな風に素材と密接に関わる出来事があるのか、と。何か厳かなものに立ち会えたような気がして。素材の動きを、当時理解はできませんでしたが、難しさ故にずっと発見をし続けていられるのではないかという気がした。そこから面白くなってきました。

何につけ、目の前に差し出されたものに懸命に取り組むうちに面白い部分を発見して、いやな部分を排除していくという傾向が強いような気がします。熔接^{ようせつ}の仕事に進んだのもそうです。鍛金における接合の手段として出会った熔接ですが、仕損じた残骸がクズ置き場に捨てられてあるのを目にして、現象として美しいと思った。目の前に心が震えることがあるのに、なぜこれを捨てて絞りや均^ゆしの仕事をしているんだろうという思いがだんだん大きくなった。熔^とかして、そこに表情を探す。卒業制作は銅でそういう仕事をしました。

鉄は大学院に行つてからです。もともとの表面の質感に興味があつて、カサカサした鉄の質感や錆の色がきれいだと思つたんです。結果的に私が使っているガス熔接

で部分的に熔かしながらアプローチし、発見しながら制作する、そのやりとりのリズムが肉体的にも精神的にも居心地が良く、試してみた事柄が次々と出て来たので、やめる理由がなかった。そんなことがいままで続いているのだと思います。

鉄熔接への関心は、表面から内部の出来事へと向かいました。性格を宿した表情を、制作行為によつて獲得していきます。

今回の展覧会名と偶然重なつた近作の《熱と庄》というタイトルは、まさにそのままでのこと。金属を熔かして繋いだ表情を、叩いて潰した先にまた何か起きないかを探る。熱や圧の具合で表層にくっついてる球がどれくらいブツと潰れるのか、熔けた鉄が隙間に入り込むのか入らないのか。熔接が弱ければ割れを生じるし、厚みのどこまで熱が通つているのかが、叩くことによつてあからさまになる。そういうことを扱っているのだと自分自身見てもよつと思つたんです。

鍛金絞りの経験から熔接へ向かつたせいも、構造を袋状に考える癖があり、いつも表と裏の問題がありました。だから立体であつても内側は空洞であり、絵面を見せる側に集中していた。表情を作るためにほぼ裏から熔接しているけれど、その熔接とフォルムとの関係はどうなのか。漠然とあつた不安や後ろめたさに向き合つて到達したひとつに、仕掛けがそのまま表情であり、構造でもある状態を覗き込める仕事をやってみました「図1」。

文章を書くこともまたモノを見ることであり、自分を確認する作業でもあります。制作中に浮かんだ言葉に触発されたり、言葉をあえて自分から探しにいき、それに触発されてドキドキすることも。不安要素を言語化することは、問題に向き合うことで、そのうちに不安も含めたことが自分がやることなのだという確証が得られ、また強い気持ちで作る行為に戻ることができそうです。私のしている熔接の扱いは金工における既存の技法ではないので、良いも悪いも自分で決めていかざるを得なかつた。美的価値と同時に、物理的にもです。過去の鍛金の物



図1 《点の園》2018年 熔接、溶断
写真：斎城卓

差しでは計れない要素が自分の作品にはあり、それに対して自分はどういう態度をとるべきなのか。そういうことをイチイチと実感するところに行き着く。始点がある。

と同時に脈々と続いてきた過去を背負った現代、いまという時代が差し出した材料と向き合い、それが何か先に繋がっていくことに携わってみたいと思います。自分がしていることは工業熔接で、使っている材料も明治以降に洋式高炉で導入されてからの大量生産による工業資材である。意識的にはなく、そういう状況に自分があり、それを自分が使い、知り得たことを作品として提示している。(工業資材を使う面白さは)まづ、簡単に手にはいること。だからこそ、表情を探りながらこねくり回し、奔放に戯れることができる。そして均質であること。均質なものを自分の手がなす些細なことでも動かしている。一方で私が使っているガス熔接は熔接の種類の中でも原始的と感じています。熔接トーチの火の強弱と手の作業次第。いまは熔接深度のコントロールとその結果から得られる情報量への可視が増えている、たとえ作品の裏側から熔接しても、表に出現する影響の仔細が見えるようになってきた。表裏の関係が密接になってきました。鍛金の周辺にあると思っていた熔接が、段々と、自分にとって熔接の周辺に鍛金があるという姿に変化してきているように思います。

最近の仕事「図2」は、部分の現象の細部に、よりセンサーが働くようになったことからできました。棒を何回も熔接して網状にしているうちに、一本の線の中にも微細が見えるようになってきたんです。この頃では手数に頼りすぎていると思うこともある。手数の量と一定以上の迫力との関係をはかれるようになってきたため、そうではない、手数ではないところでの自分の仕事の出会い方を探しているところなんです。

現象はいつも目の前にあって、こちらが行う仕事は見出すことです。微細が見えるようになってきたいま、どんな熔接状況でも、どうでも良いというような懐ができてきました。扱える現象の幅が増えてきた感じなんです。

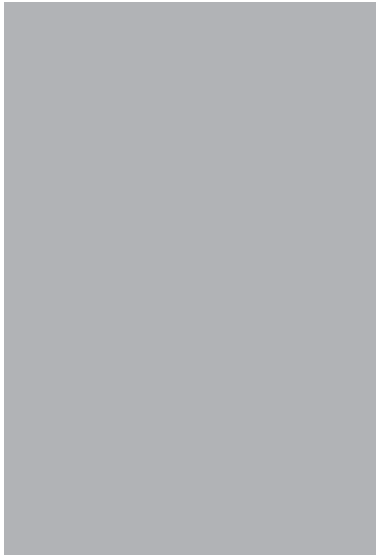


図2 《当事者は誰か》2018年 熔接、溶断
写真：斎城卓

いま動かしている材料がどちらに転んでも構わないと、大きく受け止める所から、何か見つけていけそうな気がしている。いつも出会い、発見する面白味を、改めて感じています。自身の眼が捉えた、鉄材のどの姿も扱ってみる勇気を得たのかもしれない。

細い棒が一本立っているのは、その姿がきれいだったから、なんとか立たせたくて、どうしたらそういう状況にできるかと。いまはそのフォルムの何が面白くて、何が美しいのか、その正体を探しているところなんです。

最近の「置き物」というキーワードは、先日の個展会場の展示台が低かった(六〇センチメートル程度)ことから考えが始まりました。立っている鑑賞者の目線との関係は、床の間を愛でる日本人の感覚が作用している状況である。そこにいわゆるオブジェを展示することを想定した時、ずっとあったオブジェという言葉への違和感が膨らんだ。オブジェとはニュートラルな言い方なのかもしれないし、これまでも便宜上使用してはいたけれど、正体の分からない言葉という疑問がずっとあって。それで床にモノを置く日本の文化をどう捉えるのかについて考え、この置き物というイメージの根源と現代に生きる自分が持つ感情とが出会う場としての仕事を設定したんです。(オブジェも機能的形式も素材との関わり方からフォルムを起こすという点で通底することはあっても、人が触るものと視覚優位のあり方では何かが違う。物体の「存在」ということについてずっと考えていますが、中々その言葉は自分のものとなりません。そこで浮かんだのが「佇まい」の語です。人が触るものとオブジェとは、ほんのひと熔接、金属の熔かし方に些細な違いが出てきて、家の中に置くものかどうかということを取り分ける。そういう一手への僅かな注意を向けることが、後々大きな振動となって自作全体を揺り動かす。奔放に素材の表情を探して感覚的な面白さを置いていたときは違う、人が相対することができる立体物のあり方を、言葉を探るうちに手繰り寄せつつある気がしています。

(金属造形家)

〔構成・文責・工芸課主任研究員 今井陽子〕

註

1 金属を叩いて加工する技法。絞りは当て金と呼ばれる鉄塊の曲面に金属板を置き、金槌で叩いて立体的に成形すること。また均しは叩きながら錘目や形を、整えていく工程。